

[22] 永遠との共振

イリ・キリアン振付『^{かぐやひめ}輝夜姫』

1993年6月25日 東京新聞 夕刊

『かぐやひめ』という昔ばなしを知らない日本人はいない。それは日本人の心のなかにしまいこまれ、もうほとんどカビがはえていて、だから私たちは、あの古い絵本の色あせた挿絵の、十二^{ひとえ}単のかぐや姫以外には想像もできなくなっているのである。

けれどもこの物語は、たとえば海の泡から生まれたヴィーナスのように、ほんとうは普遍的で抽象的でさえある人類の夢想なのではないだろうか。ネザーランド・ダンス・シアターによって上演されたイリ・キリアン振付のバレエ『輝夜姫』を見ながら、私はそんな思いにとらわれていた。

* * *

キリアンは、いま最も注目されている現代バレエ作家の一人で、カフカと同じプラハの生れである。あの「プラハの春」といわれた一九六八年に、奨学金を得て英国ロイヤル・バレエに留学し、以来、活動の舞台はもっぱら外国だった。しかし彼が作る舞踊作品には、はるかチェコスロバキアへの思いが悲痛なまでに込められている。

彼の作品の多くは、十人前後のダンサーがさまざまな組み合わせで構成する小品ないしは中編で、ストーリーはあるようなないような、漠然としたものだが、男女の情愛や人の一生、風土といったものにまつわる濃密な想念へと観る者を誘う。

* * *

『輝夜姫』はキリアンとしては珍しい二幕ものである。一九八八年の初演から好評で、ヨーロッパ各地ですでに六十回ちかく公演を重ねてきている。

だが今回の二度目の来日で『輝夜姫』を上演することには、キリアン自身いくばくの不安なさにしもあらず、であったようだ。というのもこれは、いわ

[22] 永遠との共振

イリ・キリアン振付『^{かぐやひめ}輝夜姫』

1993年6月25日 東京新聞 夕刊

ゆるエキゾティクな日本趣味とはまったく無関係に、物語の本質的な部分を現代バレエの最先端の手法を用いて構成した作品だからである。

幕開け、舞台上部に組んだステイールの高架の上に、白い総タイトスのほっそりとした姿が浮かび上がる。身につけた飾りは、まばらなスパンコールだけ。キリアン独特の斬新な肉体造形が、しなやかにそけく、この世ならぬ女性像を描き出す。

ネザーランド・ダンス・シアターのダンサーは一見とても無表情で、無機的と言ってもいいほど制御された動き方をするのだが、それにもかかわらず、なぜか濃厚な官能性を漂わせている。

姫に言い寄る五人の男は、上半身は裸で下は白いタイトス。いわゆる感情表現は一切ないが、張りつめた筋肉を極限まで駆使して内的情動を描き出すのは、キリアンの最も得意とするところである。

第二幕、舞台をおおいつくすメタリックな金色の幕を背に帝が登場すると、大波のように揺れるその金の幕を引きずって、姫と帝のパ・ド・ドウ。この世の権力の絶頂に包まれ、呑みこまれそうになりながら、しかしそこから遊離している女のイメージ。輝かしさと清らかさ、そして憧れと透明な哀しみが、踊り手の肉体から光のように飛び散って、舞台全体の構図として広がって行く。

私たちの眼が追っているのはダンサーの動きだが、しかしじつはその動きを通して、虚空にふりそぐ月の光の揺らめきを見ているのもあった。

* * *

たしかに日本の美意識や民俗芸能を模倣したものでは、まったくくない。だがたとえば手首や足首を内側に折り込んだり、胴体をねじり膝頭を交差させて

[22] 永遠との共振

イリ・キリアン振付『^{かぐやひめ}輝夜姫』

1993年6月25日 東京新聞 夕刊

造り上げる独特のポーズは、洋舞の手法としてもまことに意表を突くものだし、片や日本のどこを探してもそのような型が見当たらないのだが、そんな肉体造形がもし出す雰囲気は日本の稽神性の本質的な部分を貫いていて、その求心的な統一感や柔軟性そして独特の解放感を、質的に表現しえているように思うのである。

そのことはまた、キリアンの音楽理解についても言えることだ。石井真木の作曲による音楽は、和太鼓と雅楽、そして西洋音楽のパーカッションが交錯するものだが、なかでも西洋的なリズムを持たない雅楽への振付が、キリアンのもっとも苦心した部分であったようだ。区切りのない龍笛や笙の音の流れを、しかし彼はじつに微妙な、鋭い起伏のあるものとして聞き分け、それをダンスの動きとして再現する。雅楽の調べをこのようにも細やかな息づかいに満ちたものとして聞いたのは、私にとっては初めての経験だった。しかし考えてみれば、それこそが舞踊の働きなのであって、優れた振付は音楽に潜んでいる微妙なひだを浮き彫りにして見せてくれるものなのである。

キリアンの舞踊は、高度に鍛錬された筋肉と繊細なりズム感なしには踊ることができない。だが、その強靱な動きから立ち昇るのは、いつも悠久の時の流れと、内面へ深く沈潜する思念の層である。バレエ『輝夜姫』が表現しているのも、この物語に包み込まれた永遠にふれ、それと共振したキリアンの心そのものだと、私は思った。